

氏名	吳 保 華
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2033号
学位授与の日付	平成12年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	志賀文学における運命の超克
論文審査委員	教授 工藤 進思郎      教授 渡邊 護 教授 下河部 行輝      助教授 田仲 洋己 山陽学園大学国際文化学部教授 吉田 俊彦

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、志賀直哉の処女作から晩年に至るまでの主要な諸作品を取り上げ、その世界に現れたキリスト教批判、禅への親愛、死生観、救済の問題等に関する考察を通して、人間における運命の超克が、どのようにして成し遂げられてたかを追究した。既発表論文5編を取り込みながら、新たに書き起こした章・節を加えて、全5章にまとめている。ワープロ打ちでA5判146頁、400字詰に換算して約420枚の論文である。

第一章「志賀文学に見られるキリスト教」では、志賀文学とキリスト教の関係について論じた。『或る男、其姉の死』の草稿の一部を後年に至って書き改めた小説『自轉車』は、事実に基づいて書かれた作品ではあるが、作中の主人公「私」を志賀直哉とみなし、ありのままを正確に描いていると解することはできない。この点に留意しながら、「私」がキリスト教に近づいた機縁、及び「罪」を償う方法について考えてみた。『大津順吉』の後日談を書いた『過去』においても、「私」は女と犯した罪が気にかかったので、金でそれを償う。「私」が女に金を遣らねばならぬということは、完全に自身の良心を慰めるためである。それは「私」が〈罪〉を償う唯一の手段だった。いわゆる『山科の記憶』四連作の中で「醜い事」をした「自分」を、反省することも否定することもしない姿勢は、実際にこれらの諸作の底に潜んでいる作者の本当の態度ではないかと思われる。それは当時の大正文壇に対して、直哉が小説を通して示した〈私は懺悔しない〉という態度の表明だったのではないか。

第二章「志賀文学に見られる禅」では、直哉の日記・書簡や随筆等の中から禅に言及した記事を取り上げ、志賀文学における禅の本質に迫ってみた。明治40年秋の建長寺参禅は、彼がキリスト教との縁を切ろうとした前触れである。これは誰かに操られて行ったのではなく、禅によって悩みを解消する方策を見出そうとした彼自身の意志に基づく行動だったと考えられる。以下、直哉が用いた「時節因縁」「徳山托鉢」「盲亀浮木」等の禅語について考察するとともに、随筆「柳宗悦の『木喰上人の研究』に就いて」の中で「啐啄同時」と書くべきところを、あえて「啄そく同時」としていることの意味について自説を展開した。

第三章「生と死の主題」では、志賀文学における生と死のテーマを、直哉の意識の深層に眠っている〈悪魔〉のようなものに注目して考察した。処女作『或る朝』と『網走まで』において、直哉はこの〈悪魔〉のようなものを駆使して、もっとも読者に〈魅力〉を感じさせる志賀文学の一端を描いた。それは両作品の主題・思想とはあまり絡んでいないが、少なくとも作者にとっての一つの創作手法、あるいは惨劇を想像して楽しむこの作者の嗜好を示すものと言えるであろう。しかし一方では、このような作品を積み重ねるにつれて、〈悪魔的なもの〉を楽しむことから、次第にそのようなものに苦しめられる方向へ傾斜し

ていく。『クローディアスの日記』『剃刀』『范の犯罪』は、いずれもフィクションであるが、処女作と比べると、はるかに迫力を感じさせるリアルな作品になっており、志賀文学における〈悪魔的なもの〉への追求が、一つの頂点に到達していることをうかがわせる。そして『城の崎にて』になると、「自分」は三つの小動物の死に対する凝視を通して、一種の宗教的感情に近いものを獲得するに至っている。これは『城の崎にて』が、それ以前の作品を超えたものになっていることの証しである。

第四章「志賀文学における同情を主題とする作品」では、『網走まで』の延長線上の作品群について考察した。これらの作品には直哉の達観的な態度が見られることに注目したい。このことを見逃すと、直哉は単なる冷たい観察者としか見えて来ないだろう。彼は自己を主張しながら、その主題が神の主張であるところまで自己を拡大化したのである。不幸な弱者に対する彼の一貫した傍観的態度の奥に、実は真の慈悲の姿勢が含まれていることを忘れてはならない。草稿「花ちゃん」とその初出『菜の花と小娘』との比較を通して、草稿における「花ちゃん」と「菜の花」両者の対等関係が、初出に至って対等ではない関係に変わっているという結論に達した。前者は友情の救助物語であり、後者は弱者に対する強者の救助物語であった。直哉は『小説の神様』において解決できなかった本当の意味での救済問題を、『菜の花と小娘』という童話世界で一挙に解決して見せたのである。

第五章「『暗夜行路』における運命の超克」では、『暗夜行路』の主人公である時任謙作を中心に、運命と禅の問題について探究した。謙作は自分が不義の子であるという悩みを吹き飛ばすために、意識的に自分自身を廣大無辺の宇宙に置いてみることを通して、自分を芥子粒ほどに微小化しようとした。それは一時的に効果を取めたものの、時が流れるとともに、その心情はまた元の木阿弥になってしまった。しかし、大山での実践的自然体験を通して獲得できた相対意識は、穏健で堅固なものであり、一種の精神的な飛躍だったと考えられる。それはただ単に旅による自然体験の所産だったのではなく、現象としての大山の「薄い霧」を剥ぎ取ってみれば、精神世界にしみ込んだある種の宗教的感情と切っても切れない関係にあったと見なければならぬ。外見上、謙作の精神的な飛躍と禅とは、直接的には互いに関連を及ぼし合うことのない関係のように見えるが、実際にこの両者を大山の自然に媒介された普遍的関連の中に置いてみれば、やはり繋げることができると思われる。謙作の意識は禅によって影響されている。彼はまた、この影響されているという認識を持って大山の自然に向かった。そこで大山の自然の美の極致に触発され、二度となき一瞬の強い感動を獲得することができたのである。

### 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、国文学分野4名、国語学分野1名の委員で構成し、平成12年2月4日に開催した。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、審査委員が積極的に評価できるとした主要な点は以下のとおりである。

- (1) 「無神論者」を自認する志賀直哉が、実は宗教的なものと決して無縁でなかったという事実を指摘した。わけても作中に見られる種々の禅語を原典に遡って調べるとともに、直哉と禅との深い関わりに注目して論を展開したのは、従来の研究にはほとんど見受けられない本論文独自の視点である。
- (2) 第五章で『暗夜行路』を考察するにあたって、『碧巖録』第五十一則の評唱に見られる「徳山托鉢」の話や、『荘子』の「坐忘」「物化」思想との関連性を説くとともに、大山において謙作が不思議な陶酔感にとられる有名な場面が、中国明末の禅書『禅関策進』の「蒙山徳異禅師示衆」の一節と対応していることを指摘するなど、筆者によるユニークな提言が見受けられる。
- (3) 作品分析にあたり、決定稿だけでなく、それ以前の草稿や他作品等と丹念に比較・検討することによって志賀文学の本質に迫ろうとしたのは、本論文における方法の一つとして注目される場所であるが、中でも第四章の第三節「『菜の花と小娘』論」は、草稿「花ちゃん」から初出「菜の花と小娘」へのテーマの変容を見事に論証するとともに、その背景となる作者自身の心情や交友関係についても目配りした手堅い考察と言える。
- (4) 全体的に着実な論文として評価できるとともに、文章もわかりやすい正確な日本語で書かれており、これらの点も側面から本論文の価値を引き立てている。

- 一方、審査を通じて指摘された問題点もないわけではない。内容に関わる点として、
- (1) 志賀文学における外国文学の影響について、トルストイの『復活』に言及した箇所が見受けられるものの、表面的な指摘に終っており、更なる掘り下げが必要である。
  - (2) 武者小路実篤との交流については言及されているが、他の白樺派の作家たち及びその作品との比較研究という視点が欠落している。
  - (3) 「禅」の面から志賀直哉を取り上げたのはユニークな視点として評価されるが、第四章の「同情」というテーマと「禅」との関係の有無についての言及はなく、直哉がまたキリスト教から離れたのはなぜだったのか、その点の追究も不十分である。
  - (4) 全体的な問題として、掘り下げの足りない部分、解釈や論の展開の上で短絡的なところが見受けられる。

などの指摘があった。しかし、これらの点の多くは欠陥というよりも、今後さらに研究を深め発展させる上での期待といった趣旨のものであり、本論文に示された研究成果を大きく損うものでないことが確認された。

審査委員会は、以上の事柄を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。